

北海道支部会報

-特集 「細菌学会の将来を語る」 -

日本細菌学会北海道支部

2014年12月 第23号



編集・発行：日本細菌学会北海道支部

目次

<第81回日本細菌学会北海道支部学術集会報告>

・第81回日本細菌学会北海道支部総会を終えて

札幌医科大学医学部微生物学講座 横田伸一 4-5 ページ

・最優秀賞を受賞して

北海道大学大学院保健科学院 博士課程3年 石田香澄 6 ページ

・優秀発表賞の受賞に際して

北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター バイオリソース部門 博士課程2年 山口智之 7 ページ

・第81回日本細菌学会北海道支部学術総会優秀賞を受賞して

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター 感染・免疫部門 大西なおみ 8 ページ

-特集 「細菌学会の将来を語る」 -

・特別寄稿 故郷である北海道に帰ってきて

小熊恵二 10-12 ページ

・新幹事熱く語る!! 『細菌学会への期待と抱負』

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター 感染・免疫部門 大西なおみ 13-14 ページ

札幌医科大学医学部 微生物学講座 白石 宗 15-16 ページ

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 食品衛生学ユニット 臼井 優 17 ページ

北海道大学大学院歯学研究科 口腔分子微生物学教室 長谷部 晃 18-19 ページ

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 獣医細菌学ユニット 村田 亮 20 ページ

帯広畜産大学 動物・食品検査診断センター 食品リスク分野 豊留 孝仁 21-22 ページ

<新支部長が語る>

・日本細菌学会北海道支部新支部長として

札幌医科大学医学部微生物学講座 横田伸一 23-24 ページ

<菊池理事が語る>

・日本細菌学会理事を務めて

酪農学園大学獣医学群獣医細菌学 菊池直哉 25-26 ページ

<お知らせ>

・第82回日本細菌学会北海道支部学術総会について

北海道医療大学歯学部口腔生物学系微生物学分野 中澤 太 27-28 ページ

<研究室紹介>

・動物衛生研究所北海道支所における私の研究：柳の下のにはまだドジョウがいた

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 動物衛生研究所 寒地酪農衛生領域
内田 郁夫 29-30 ページ

<会則>

31-32 ページ

<日本細菌学会北海道支部学術総会歴代開催記録>

33-34 ページ

<日本細菌学会北海道支部 平成26年度新役員・名誉会員名簿>

35 ページ

<編集後記>

36 ページ

<第 81 回日本細菌学会北海道支部学術集会報告>

第 81 回日本細菌学会北海道支部学術総会を終えて

第 81 回日本細菌学会北海道支部学術総会長

横田 伸一（札幌医科大学医学部微生物学講座）

細菌学会北海道支部の第 81 回の支部学術総会は平成 26 年 8 月 29 日（金）、30 日（土）に札幌医科大学の臨床医学研究棟講堂において開催させていただきました。60 名をこえる方々にご参加いただき、活発な議論が展開されました。これもご参加いただいた皆様のご協力のおかげと感謝申し上げます。会運営はおおむね良好に進められたと思いますが、いろいろと行き届かなかったところも多々あったかと思います。お詫びとともに、ご指導いただけましたら幸いです。

昨年は網走、一昨年は帯広での開催、その前は IUMS が札幌で開催される関係でミニシンポジウムが行われています。さらにその前はクラミジア研究会との合同開催で、札幌の地で通常の支部会が開催されるのは何と 5 年ぶりのこととなりました。網走と帯広の会は学術プログラムの充実が目覚ましく、それに負けないようにというのがプレッシャーでした。そのようなこともあって今回は企画の段階であれこれ迷いました。札幌開催時は土曜日一日で実施するのが慣例でありましたが、プログラムを一日に収めるのが困難となつたことと、遠方からお越し頂いた方々の便を考え、試みとして金曜午後と土曜の 2 日で実施させていただきました。せっかくの機会でもありましたので特別講演 3 題、教育講演 2 題と欲張ってみました。特別講演は、札幌徳洲会病院 小児科医長の成田光生先生に「ミクロとマクロの視点から特殊な微生物・肺炎マイコプラズマの実像に迫る」、琉球大学大学院医学研究科 細菌学教講座教授の鈴木敏彦先生に「インフラマゾーム活性化と細菌感染：その分子機構から何が見えるか」、公益財団法人がん研究会 研究本部 知財戦略担当部長 内海潤先生に「アカデミアにおける創薬の特許戦略」のご講演を賜りました。教育講演は、国立感染症研究所 バイオセーフティ管理室 伊木繁雄 先生に「バイオリスク管理の考え方」、北海道大学大学院先端生命科学研究院 北村朗先生に「生細胞蛍光イメージング法を用いた細胞生物学研究」の演題でご講演いただきました。細菌学ということにこだわらず、ものの見方が変わるような面白い話をしてくれる先生をということでお願いいたしました。ご講演いただいた先生方には、ご多忙中のところアトラクティブなお話をいただきあらためて感謝申し上げます。

一般演題は、直接のお願いを全く必要とせず 29 題もの応募をいただきました。内 25 題が支部会賞の対象で、いかに若手の方々の活躍が目覚ましいかがわかりました。さらには 9 つ（約 3 割）の一般演題が留学生による英語のプレゼンテーションとなり、支部会とは思えないほどのボリュームとなりました。会運営を担当させていただいた者としてはプログラムの編成に戸惑うくらいの悲鳴をあげておりました。本来ならば発表時間をもっと長くとりたかったところです。演者の方々には十分な発表、討論時間ではなかつかもしれません。この点、お詫びいたします。また、日程の都合からご参加いただけなかつた方もおられたと伺っています。もしかするとさらに多くの一般演題の応募があったかもしれません。それだけのポテンシャルが北海道支部会にあることはうれしい限りです。

支部会賞は参加者全員による審査で決定し、本学術集会の一番最後に表彰式を行いました。最優秀賞は、石田香澄さん（北海道大学大学院保健科学研究院 病態解析学分野）の「肺炎クラミジアのⅢ型分泌装置エフェクター CopN は aldolase A と相互作用する」、優秀賞は大西なおみさん（北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター 感染・免疫部門）の「炭疽の制圧を目指した疫学調査と新規ワクチンの開発」と山口智之さん（北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター バイオリソース部門）の「Changes in supercoiling activity of *Mycobacterium leprae* DNA gyrase by amino acid substitutions conferring quinolone resistance」が受章されました（下の写真を参照ください）。受賞された方、今回は残念ながら受賞できなかつた方もこれから益々のご活躍を期待しています。

今回の支部学術集会は札幌医科大学医学部微生物学講座のスタッフと大学院生で運営させていただきました。みんな要領よく仕事を進めてくれたおかげで大きなトラブルもなく終了できたと思

っています。この場を借りまして、スタッフ一同にお礼を述べたいと思います。



最優秀賞を受賞して



北海道大学大学院保健科学院 博士課程 3 年
石田香澄

この度、第 81 回日本細菌学会北海道支部学術総会において発表いたしました「肺炎クラミジアの III 型分泌装置エフェクターCopN は aldolase A と相互作用する」という演題に対しまして、最優秀賞を頂くことができましたことに厚く御礼申し上げます。

さて、私の研究対象でありますクラミジアはグラム陰性偏性細胞内寄生性細菌であり、宿主細胞に強く依存しなければ生きていくことができません。では、クラミジアは宿主細胞の中でどのようにして免疫機構から逃れ、またどのようにして宿主のエネルギーを奪い、増殖に適した環境を手に入れているのでしょうか。これらの疑問に対する明確な答えはまだ出でていないのが現状ですが、どうもクラミジアは III 型分泌装置とそこから分泌されるエフェクターを利用して細胞内で増殖するようだ、ということがわかつてきました。III 型分泌装置は *Salmonella* や *Yersinia* などのグラム陰性細菌に広く保存されている分泌装置であり、これらの細菌の病原性に非常に重要なことが多い多くの研究から明らかにされています。クラミジアについても、III 型分泌装置から分泌されるエフェクター分子が、宿主細胞の様々な分子やシグナルを修飾してクラミジアの細胞内増殖を手助けしていることがわかりつつあり、今回私が発表させていただいた研究テーマのキーワードである「CopN」もクラミジアの増殖に密接に関わるエフェクターの一つです。CopN はクラミジアの増殖に必須であることが 2008 年の Nature 誌に報告され、その後の研究により tubulin と結合して微小管の形成を阻害することがわかつてきました。しかしながら微小管形成阻害がクラミジアの増殖にどのように影響を与えているかについては明らかにされていません。私たちは CopN が解糖系酵素である aldolase A と結合すること、aldolase A はクラミジア増殖抑制に関わる可能性があることを見出しました。これらのことから、CopN は aldolase A と結合して aldolase A のクラミジア増殖抑制機能を阻害することが予想されますが、aldolase A がクラミジア増殖を抑制する機序や CopN が aldolase A の機能を阻害する機序など、明らかにしなければいけない課題は山積みです。しかし、私たちが明らかにしたこれらの現象は、クラミジアの増殖機構を理解する上で非常に重要な知見であると信じ、またいつの日か皆様に成果を発表できますように、これからも研究に邁進したいと思います。

それでは最後となりましたが、本研究発表をする機会を与えてくださいました札幌医科大学の横田伸一先生をはじめとしますスタッフの皆様、また日々ご指導いただいている山口博之先生と松尾淳司先生、研究室の皆様方に心より感謝申し上げます。

優秀発表賞の受賞に際して

北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター バイオリソース部門
博士課程 2 年 山口智之

この度、第 81 回日本細菌学会北海道支部学術総会 優秀発表賞にご選考いただき、北海道支部会ご所属の先生方に厚く御礼申し上げます。また、日頃より丁寧なご指導をいただきしております鈴木定彦教授、中島千絵准教授をはじめ、バイオリソース部門のメンバーにこの場をお借りして御礼申し上げます。

本学術集会では、「Changes in supercoiling activity of *Mycobacterium leprae* DNA gyrase by amino acid substitutions conferring quinolone resistance」と題し発表いたしました。*Mycobacterium leprae* は現在も世界中で多くの人々を悩ませているハンセン病の原因菌であり、治療に用いられる抗菌薬に対する耐性獲得が重大な問題となっていますが、化学療法を必要とするヒトや動物の様々な細菌感染症の対策において抗菌薬への耐性獲得は大変悩ましい問題です。私にとってこの「細菌の抗菌薬耐性」は、博士課程学生としてバイオリソース部門に所属する以前から重要なキーワードでした。学部卒業後、小動物診療施設の獣医師として勤務しておりましたが、学部学生の時分に薬剤耐性菌について研究していた経緯もあって、いくつもの薬剤耐性菌感染症の診療に関わりました。結果、その治療の難しさを痛感し、細菌感染症の治療法・予防法をより深く知ろうと思い、進学に至りました。大学院入学までに間がありましたが、それまでに幸いにも多くの研究者からお話を伺うことができたことが大きな要因であると思います。この度の学術総会でも発表後先生方から様々なご質問ご意見を頂戴することができ、とても励みになりました。今後も皆様から刺激を頂きながら、自身の研究に活かしていくたいと考えております。また今回の発表を通し、発表技術にもまだまだ改良すべき点が多いと再確認することができました。今回先生方から頂いたご質問やご意見を元に、より解りやすい発表のための工夫を検討し、次回の発表ではさらに良い発表ができるよう努めようと思います。また今回の発表でも随分悩まされた生来の緊張しやすい性分もどうにか克服したいところではあります。

最後になりますが、この度発表の機会を与えてくださいました横田先生、山本先生、小笠原先生、白石先生及びスタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

有り難うございました。



第81回日本細菌学会北海道支部学術総会 優秀賞を受賞して

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター 感染・免疫部門
大西 なおみ

この度、第81回日本細菌学会北海道支部学術総会における発表演題「炭疽の制圧を目指した疫学調査と新規ワクチンの開発」につきまして、優秀賞を受賞させて頂きましたことに心より感謝申し上げます。

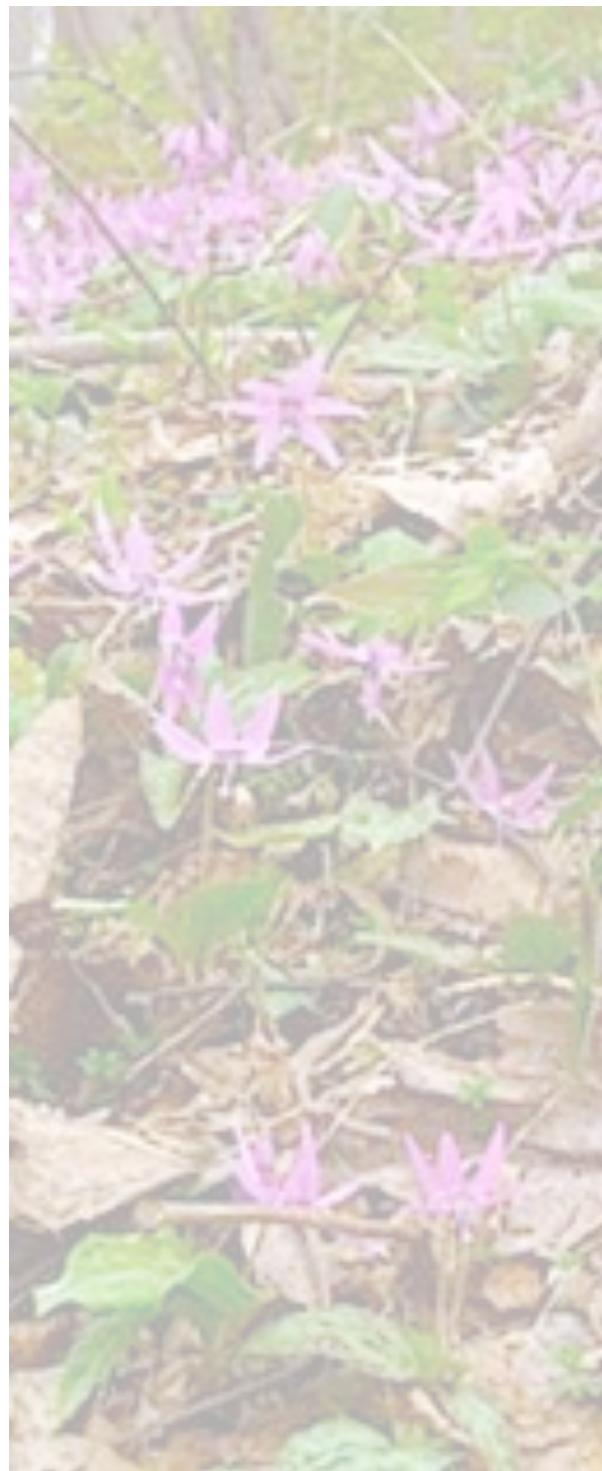
炭疽菌は、人類史上最初に発見された病原細菌であり、医学、疫学、獣医学領域のみならず、近年の分子生物学や構造生物学領域においても極めて詳細な研究が進められています。炭疽は我が国を含めた先進諸国では家畜衛生等の対策が

奏功し、その自然発生は稀となっていますが、世界的には現在も年間2万人と、100万頭の動物で感染・発症が報告されている重大な感染症です。炭疽菌は土壤中に存在し、ヒトにおける炭疽の自然発生は炭疽菌に感染した動物への接触が主な原因であり、炭疽菌がヒトからヒトへ直接伝播されることはほとんどありません。そこで私たちは、炭疽の制圧には、①疫学調査に基づき炭疽の発生を予測すること、②炭疽菌の感染経路を推定し感染動物を的確に検出し淘汰すること、③感染動物と接触するリスクを伴った人へのワクチン接種、がきわめて効果的であると考えてそれぞれの研究課題に取り組んでいます。本学術総会では、2011年にザンビア共和国で発生した炭疽のアウトブレイクに際して行った疫学調査の成績を示すとともに、疫学調査で単離した菌株の網羅的比較ゲノム解析による感染経路の究明を行った研究成果を発表させていただきました。今回多くの方に私たちの研究を紹介させていただく機会をいただき興味を持っていただきましたことに加え、優秀賞まで受賞させていただきましたことを大変ありがたく嬉しく感じています。

私は現職に着任しちょうど3年が経ちました。これまで病態医科学に関わりながらも、研究の着眼点は病原因子による病態発現機構の分子機構解明にあり、病気そのものを捉え研究を考えることはほとんどなかったかもしれません。現職に着任し、感染症が流行する現地における疫学調査に参加したことは、論文を読むことや人の話を聞くことからだけでは決して感じられないような感染症の実態と恐ろしさを目の当たりにする貴重な機会となりました。本研究の遂行を通じて、私は研究者としてこの感染症を克服するために自分が為すべきことはなんなのか、強い使命感を持つと同時に感染症研究の本質的な重要性を考えるようになりました。本賞の受賞を励みとし、今後も感染症克服への貢献を強い動機として本研究を発展させていきたいと思います。最後に、本研究を実施するにあたり多大なお力添えをいただきました共同研究者、研究室の皆様方に心より感謝申し上げます。



-特集 「細菌学会の将来を語る」 -



故郷である北海道に帰ってきて

小熊惠二

札幌を離れ、22年間岡山に住み、この4月に函館に帰って来ました。

先日、山口先生から、北海道支部では支部会報を出しており、次回の特集は「細菌学の将来を語る」ですので、この点も含めて帰道の挨拶を書いて下さいと言われました。一緒に送られてきた新役員のお名前を見ても顔が浮かんできません。ということは、支部会員の多くの方は私の事は分からぬと思いますので、簡単に自分の経歴を紹介した後、研究生生活や学会に関する事にも少し言及し、責任を果たしたいと思っています。

私は昭和46年に北海道大学（以下、北大）医学部を卒業しました。臨床よりも世間から離れ日夜研究をする生活にあこがれ、細菌学講座の大学院に入りました。教室では、岩内での「イズシ」による食中毒から、日本で初めてボツリヌス菌を分離された飯田廣夫教授の薰陶を受け、ボツリヌス菌の研究を開始しました。先生はボツリヌスC型, D型菌の毒素産生性はbacteriophageにより支配されている（phage conversion）事を発見されたばかりでしたので、その詳細を研究しました。この現象を確定するためにも、ファージのDNA中に毒素遺伝子がある事を証明したかったのですが、当時はボツリヌス毒素のような危険なもの遺伝子をクローニングするのは規制されていましたので、まずこの現象を色々観察し、その実態を明らかにしました。遺伝子配列を決定したのは十数年後ですが、その間、代わりに、抗毒素抗体による毒素の中和反応で決定していたC型, D型菌の分類は混乱していましたので、代表的な4菌株より毒素を精製し、各種抗体を作製し、その抗原性を詳細に解析しました。最初は北大獣医の首藤文栄先生（後に岩手大学教授）らとアフィニティカラムを用いて、C型, D型毒素には特異抗原の他、多数の共通抗原があり、これらが混乱の原因であること、さらには、C型, D型のモザイク毒素がある事も認めました。しかし、これらをInfection Immunity等に数報発表しましたが、まだ疑いの目もありました。タイミング良く、モノクローナル抗体という手法が出てきましたので、これに飛びつき、世界で初めてボツリヌス毒素に対するモノクローナル抗体を作製し、上記の事を証明しました。

昭和58年に札幌医科大学（以下、札医大）の微生物学講座の教授になってからは、遺伝子に興味を持っていた教室員の藤井暢弘さん（後に私の後任教授）や木村浩一さん（現、北海道教育大学教授）に神経毒素遺伝子のクローニング・全塩基配列の決定を、菌の性状や臨床的な事は道立衛生研究所の武士甲一さん（後に帯広畜産大学教授）にして頂き、これらで多くの成果を上げました。次の仕事として、神経毒素は培養液や食品中では無毒成分と結合した巨大分子（Progenitor toxin）として存在しますので、この巨大分子の構造と機能の解析を試みました。札医大で大事な点が大まかに分かりましたが（その中心は、若いのに教室員を統治していた女性の続佳代助手）、平成4年には岡山大学（以下、岡大）医学部の細菌学講座に転出しましたので、その詳細は岡山で進めました。この時、中心になっ

て解析してくれたのは、教室員であった友近健一先生（後に岡山学院大学教授）と札幌から来てくれた藤永由佳子さんと井上薰さんでした（実は、私はお二人のお父さんには、札幌で大変お世話になっていたのです）。二人とも大変優秀で、現在、藤永さんは大阪大学（微研）の教授、井上さんは米国に留学し、現地の方と結婚し、米国で研究を続けています。さらには、東京農業大学の大山徹教授や渡部俊弘教授、岡山理科大学の西河淳先生（現、東京農工大学教授）らのご支援も受け、皆でこの点を解析し、大変興味深い成果が多数得られました。遺伝子の方も、progenitor toxin遺伝子の次はファージ遺伝子全体の塩基配列を、阪口義彦大学院生が、信州大学の林哲也先生（現、宮崎大学教授）の御指導により完成させました。他方、その頃になると、大学でも世の中に役に立つ研究もすべきとの風潮が出て来ましたので、毒素の治療への応用研究も開始しました。何と米国では、あの強力な毒素を筋肉内などに接種することにより、各種ジストニアを治療する事が進められていたのです（これはコペルニクス的発想ですが、これを最初にされたのは、私が米国に留学していた時、隣の実験室で一人静かに研究していた初老の紳士であるDr. Schantzでした）。これはProgenitor toxinを用いたものでしたので、何回かの接種により抗毒素抗体が産生され易いのではと考え、私達は神経毒素単独での治療を目指しました。まず、大学院生の有満秀幸さん（現、藤田保健衛生大学講師）や李在哲さん（韓国からの留学生。現在は韓国で治療用毒素を作製・販売する会社の重鎮）などが、神経毒素のみを簡単に精製し、長期間安定して保存できる方法を開発してくれました。次いでこの神経毒素を用いて、岡大の泌尿器科の先生と一緒に尿失禁の患者さんに投与し、大変良い効果がある事を証明しました。最近では、歯学部の先生とも共同で、実験的に作製したラットの三叉神経痛にも効果があることを認めました。ボツリヌス毒素は運動神経のみで、知覚神経には作用しないと言われていますので、これは大発見と思いますので、今後多くのデータが得られる事を期待しています。なお、私はこれらの研究で、平成17年に浅川賞を頂きました。最後のデータ以外の詳細は受賞論文に書いてありますので、ご覧頂ければ幸甚です。また、藤永さんは黒屋賞を受賞しましたが、井上さんを始め他の方は頂いていません。井上さんなどは充分な論文を発表していますが、米国から帰って来なかった事もありチャンスを逃してしまった訳です。藤永、井上さんの論文は、同時期に発表され互いに密接に関連したものですので、このような時には、二人一緒に受賞できるようにして良いのではと思っています。

このように、ボツリヌスに関する研究を生涯続けました。解析にはその時点で最も良い方法を用いる事とし、良いものが無い場合はその問題点を覚えておき、新たなる良い方法が出て来たらそれを用いて解析するというシジコサが大事だと思います（継続は力なりです）。その際、自分一人で出来ることには限界がありますので、色々な方と共同研究すること、共同研究で良い結果が出たら、成果を分け合う事が大事と思います。

私はボツリヌスの研究の他、札医大の教授になってからは、内科や眼科の先生方と一緒に、それぞれ「*H. pylori*」と「ベーチェット病とレンサ球菌」の仕事も開始しました。前者は、この時より岡山まで行動を共にしてくれた横田憲治さん（現、岡大准教授）と札医大出身の大学院生であった林俊治さん（現、北里大学教授）が、後者は北大獣医の磯貝恵

美子さん（現、東北大学教授）とそのご主人の磯貝浩さん（現、札医大准教授）を中心です。岡山に赴任すると、教室では平井義一先生らも*H. pylori*の事を研究されていたので、仕事が順調に進み、平井さんは岡大医学部の賞を受賞された後、自治医科大学の教授に、横田さんも日本ピロリ学会の学会賞を始め、幾つかの賞を受賞されました。もちろん、共同実験していた臨床の先生方も色々な賞を受賞されています。医学細菌学を目指すなら、このように、臨床の先生と一緒に研究する事は非常に大事であると思っています。

定年が近くなると、大学や学会での仕事が増えますが、教室には日本人の学生さんばかりでなく、中国やインドネシアからの留学生がまだ数人いました。これらの方の博士論文の取得や学会の開催など、大変な仕事をしてくれたのは、助手（助教）の藤浪良仁（現、科学警察研究所）、綾田潔（現、開業）、山本由弥子（岡大継続）、鈴木智典（現、東京農業大学）の各先生方と歴代の秘書さんです。皆さん何事に於いても大変親切であり、私は本当に良い方ばかりに囲まれて幸せであったと感謝しております。

上述のように、私は北大、札医大、岡大と移りました。どこでもそれなりの長所と短所があります。大事な事は、短所の方にはあまりとらわれず、やりたい事を（継続）して、自分を磨き生かす事です。若い方も職場での自分の役割を自覚し、遠慮なく意見は述べるが最終的には協力し合うようにして下さい。上記のように、人の和が大事です。それにより楽しい職場になり、業績も発展するでしょう（私の教室のモットーはBeautiful & Elegant Lifeでした）。長くなりましたがこれで止めますが、私の研究の概要と研究生活で大事であると思っている事を述べました。もう既に言われている事ばかりですが、若い人に参考にして頂ければ幸甚です。

学会の発展ですが、今、細菌学会が直面しているのは会員数の減少と財政の悪化です。米国の学会（ASM）などと異なり、我が国では色々な領域の研究者がそれぞれの学会を設立しており、資金の面から幾つかの学会の会員になるのが困難な状況では、基礎的な本学会の会員がある程度減少する事はしかたがないのかも知れません。会員の意見を聞き、総会と支部会（さらには理事会や各種委員会）のあり方を再検討し、経費を削減しつつ、会員を増加させる事を試みるしかありません。細菌学会の存在を行政や世間にアピールする事も重要です。これまで続けられている小・中学校への無料での出張講演も、出来たら対象も拡げ、各支部で積極的に進めるべきでしょう。また、3年に1回施行される評議員選挙等も数百万円の費用がかかります。私は、既に各支部で優秀な方が評議員になっていますので、各支部がこの中からそれなりの人数を全国評議員として、話し合いなどにより選出すれば良いのではとも思っています。最近、細菌学会全体でこれらの問題点を検討し始めましたので、良い案が出、更なる発展をする事を祈念しております。頑張って下さい。

【新役員のメッセージ】 細菌学会への期待と抱負



北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター 感染・免疫部門
大西 なおみ

この度、日本細菌学会北海道支部会の幹事に就任致しました北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターの大西と申します。81回を数える伝統ある北海道支部会の幹事を拝命し、身の引き締まる思いが致します。支部会長、評議員の先生をはじめ会員の皆様のお力添えをいただき、本会の発展に微力ながらお役に立ちたいと思っております。

私は日本細菌学会に入会して日が浅く、ようやく2年が経ったところです。顔見知りでない先生も多いことと思います。今回、本支部会会報において「細菌学会への期待と抱負」というタイトルでご挨拶をさせていただく機会を頂戴し、光栄であると同時に少し困惑しておりますが、せっかくの機会ですので自己紹介とこれまでの経験を踏まえた学会への期待を書かせていただこうと思います。

私は富山県富山市の出身で、1999年に北海道大学理学部化学科に入学し、大学と同大学院では化学ならびに分子生物学を専攻しました。2008年にヘルコバクター・ピロリ感染を起点とする胃発癌機構の研究成果により博士号を授与され、その後2010年までを北海道大学遺伝子病制御研究所において感染癌研究に携わりました。2010年秋には出産を機に夫と同居するために転居、退職し、出産後は、名古屋大学大学院医学系研究科において短時間勤務で雇用していただき放射線発癌の研究課題に取り組みました。研究者としての再スタートを感じた矢先、夫の海外赴任が決定し、今後の自分のキャリアについて改めて考えることとなりました。そのような折に現職の公募を聞き、2011年8月より住み慣れた北海道に戻り現職に着任致しました。育児と研究の両立を試みることは多くの幸せを感じられる一方、時に困難も伴います。先輩達からのご自身のキャリアからの視点、子育て経験の視点からアドバイスをいただくことは大きな励みになっています。また、未熟ではありますが私が大学の女性研究者支援制度や市区の育児支援制度を活用しながら研究に携わることは、これから子供を持ち研究を続けようとする若い研究者を応援することにも繋がるとの応援を多くいただきますので、今後も今の環境に感謝し、精一杯務めていきたいと考えています。

以上、述べましたように私のこれまでの研究背景は癌研究及び分子腫瘍学であり、これまで日本癌学会に所属していました。日本細菌学会に入会するきっかけとなったのは、2014年8月に北海道ニセコ町にて開催された「第8回細菌学若手コロッセウム」の開催に向けてその企画・運営を行うワーキンググループを仰せつかつたことでした。細菌学若手コロッセウムは、日本細菌学会からの支援を受け、細菌学に携わる若手研究者の学び合いの場を提供することを目的として毎年開催されています。細菌学若手コロッセウムの大きな特徴は、若手研究者が主体の自由かつ柔軟な企画立案であり、今年もたくさんの若手らしい試みが企画されました。その一つは、微生物学に関わる5つの学会等(日本細菌学会、共生微生物研究分野、ゲノム微生物学会、微生物生態学会、寄生虫学会)から気鋭の若手研究者を招聘し、それぞれの学会を代表する若手研究者により企画・進行される“エースセッション”です。国内では多くの学会にそれぞれ若手の会が設けられていますが、所属学会を越えた若手研究者間の交流は極めて限定的であると感じます。そこでエースセッションでは、微生物学に係るそれぞれの研究領域を深く知ることで所属学会横断的な交流を促進することを目指しました。エースセッションは、各会の「エース」と呼ばれる研究者の研究姿勢や熱意、プレゼンテーション手法を学ぶ刺激の場としても好評だったことに加え、参加者からは多分野間の交流を楽しみ、自身の輪の広がりを実感し有益な交流を持てたことを喜ぶ声が多数寄せられました。もう一つは、今回初めて会場に託児室とベビーシッターを配置しました。利用者は2名、それぞれ0歳と2歳のお子様をお連れになり参加され、その託児費用は全額を事務局負担(自己負担無し)とさせていただきました。研究の発展には、研究成果を発表し多くの人と意見交換を行うことが不可欠ですが、研究職ではこれから飛躍を期待する時期にライフィベントが重なりがちです。学会会場に少ない自己負担で利用できる託児室が設置されることは、多様なライフステージにある研究者を支えるのみならず、これから子供を持ち研究を続けることを希望しながらも不安を感じている学生達からも強く望まれていることが分かり、高い評価をいただきました。

日本細菌学会は88回を数える由緒ある学会であり、会を支える多くの先生方のご努力が結実して現在の学会があるのだと感じます。今後もこのようなご努力を継承しつつ、評議員の先生方のご意向はもちろんのことですが、私は若手研究者として、今後の細菌学の礎を築く若手研究者が必要とすること、期待することに都度柔軟に対応していただくことを日本細菌学会に期待したいと思います。多くの情報に接する中、若手研究者が会費を払っても十分参加したいと思っていただけるような学会はどのような姿かを考えると、日本の細菌学を牽引する高い専門性を有した学術団体であることに加え、研究分野や興味の範囲を超えて多様な研究者を歓迎し、積極的に支えてまとめあげることで、この領域のリーダーとしての存在感が示されることが重要と考えます。そのようなリーダーにより自由闊達な議論の場が提供されることで研究者は団結し、細菌学の新たな発展が培われるものと感じます。例えば先日の細菌学若手コロッセウムで出された要望を見ますと、研究分野を越えた交流の企画を増やしてほしいこと、キャリアを相談する場が欲しいこと、学生への参加費優遇等を含め、若手に成長の機会を柔軟に与えてほしいこと、安価で利用しやすい託児室の設置などが挙げられました。私も若手研究者の一員として、ますますの成長を目指し研究を展開していくたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻の程、何卒宜しくお願ひ申し上げます。

【新役員のメッセージ】 細菌学会に期待すること



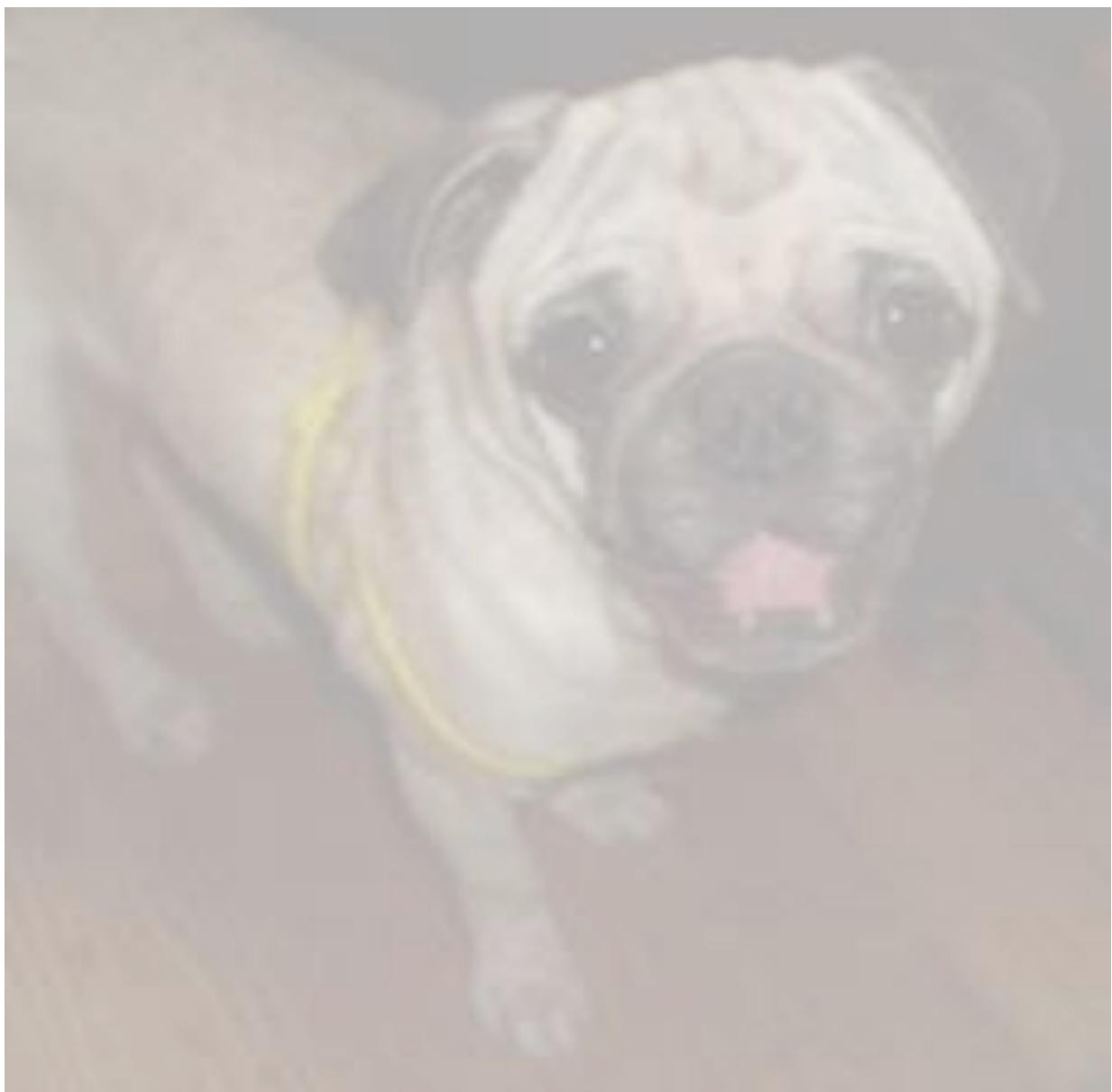
札幌医科大学 医学部微生物学講座
白石 宗

はじめまして、この度日本細菌学会北海道支部会の幹事を務めさせていただく事となりました、札幌医科大学医学部微生物学講座の白石宗(しらいしつかさ)と申します。新しく幹事を務めさせていただくにあたって、現支部長の山口先生より、「細菌学会の将来を語る」というテーマでメッセージをとのことでしたので、僭越ながら誌面を少しお借りしたいと思います。…しかしながら、私自身がまだまだ細菌学会の将来を語れるほどの身分ではありませんので、私なりに思ったことを述べさせていただきたいと思いますのでご容赦下さい。

私は、昨年の10月に現在の札幌医科大学医学部微生物学講座に着任し、細菌学会にはその際に入会させていただきました。もともと乳酸菌を研究対象として農学分野に身を置いていたこともあり、医学系細菌学分野のお話を聞く機会はそれまであまり無く、面識のある先生もほとんどおりませんでした。そんな中、たくさんの(細菌学会で活躍される先生を含む)若手研究者の方と知り合うきっかけとなったのが、今年8月に開催された細菌学若手コロッセウムでした。細菌学若手コロッセウムとは、細菌学会が設立する若手研究者育成のための支援プログラムで、感染現象、基礎細菌学、ゲノムインフォマティクス、環境、応用、モデル微生物、真菌、植物寄生細菌、工業微生物など、幅広い研究分野の学生を含む若手研究者を対象に2泊3日の合宿形式で研究発表を行い、親睦を深めるというものです(参加者は細菌学会の会員である必要は無いようです)。この会の優れたところは、微生物というキーワードのもと、幅広い研究分野の若手研究者が集まってみっちり情報交換できるところでした。我々が普段参加する一般的な学会は、近い分野の研究者が集まり、研究発表を行います。これは、より専門的な理解を深めるということで有効だと思いますが、視野を広げるという意味では、前述した細菌学若手コロッセウムのような、色々な研究者がざつくばらんにディスカッションを行うことも重要であると感じました。例えば、農学系の細菌研究者は日本農芸化学会を活動場所として、医学系の細菌研究者は細菌学会を活動場所としている場合、

微生物の解析方法に関する知見はどちらにも重要な情報です。しかし、両者が情報交換する場が無く、この共通して必要な情報をディスカッションする場所が重要だと感じました。最近、私の周りでもいくつかこのようなセミナーが有志で企画され、参加させていただいておりますが、参加者も多く大変刺激になります。このような経験から、これから細菌学会に期待する役割として、これまでの学会活動はもちろん、微生物というキーワードのもと、学術分野の垣根を越えた研究者同士の情報交換を促進することが必要なではないかと思います。これは、微生物学分野の活性化につながり、延いては細菌学会の発展につながるものと思います。

以上のような考えは、特に新しいものではなく、多くの方が既にお気付きの事なのかもしれません。単に「言うは易く行うは難し」で具体的な活動ベースで考えた場合、そう簡単ではないだけなのかもしれません。実際に前述した細菌学若手コロッセウムのワーキンググループの方々にお話を聞くと、開催までの準備や当日の進行など相当な苦労があったようです。私自身まだ具体的なアイディアを持っておりませんが、今後幹事として以上のような視点を意識して、細菌学会北海道支部会および皆様のお役に立てるよう取り組んで参りたいと思っております。まだまだ若輩者ではありますが、ご協力のほどよろしくお願ひいたします。



【新役員のメッセージ】 細菌学会への期待と抱負

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 食品衛生学ユニット
臼井 優



早いもので細菌学会北海道支部会に所属させていただき約4年が経とうとしています。私が、支部会に参加させていただくようになり、最も驚いたことは、支部会のアットホームさです。支部会に参加するまでは、学会の懇親会などに参加しても知り合いが少なく、話す内容や相手に困ったのですが、支部会では、参加者の仲間意識が強く、非常に暖かく迎え入れていただけました。もちろん懇親会だけではなく、学会発表者に対する質疑の内容についても、相手をけなしたりするものではなく、真に建設的な意見が交換されていると感じています。

今後の支部会に対する期待：現在、支部会に参加している学部は、医学部、歯学部、獣医学部、農学部が多くを占めており、薬学部や工学部（特に生命工学）の参加が少ない状況かと思います。これから細菌学の分野で良い研究、活性の高い研究を行うには学部の壁を越えた連携が必要と考えています。今後は、薬学部や工学部を巻き込むことで北海道における細菌学ネットワークを構築し、将来的には共同研究などに進んでいくことを期待しています。

今後の抱負：北海道支部会という地域を生かした大学間、学部間のネットワークに私も参加・利用させていただき、北海道から細菌学を盛り上げていきたいと考えています。

【新役員のメッセージ】 細菌学会への期待と抱負

『逆張り』



北海道大学大学院歯学研究科 口腔分子微生物学教室
長谷部 晃

このたび私は細菌学会北海道支部会の幹事を拝命いたしました。その上私のような若輩者がこのような原稿を書くことになるとは、と驚いておりましたが、よく考えてみると大学を卒業してからもう 20 年近くになり、立派な中年のおじさんになっているということにあらためて気づかされました。

北大歯学部で学生時代を過ごしただけでなく、さらに勤務先としても同じところで過ごしてきたので、頭頂部の毛髪量に対する皮膚面積の相対的増加以外にあまり自分自身に変化がない生活をしてきていました。そのためいつまでも若輩者気分が抜けなかったのだと思われます。とは言え、研究の世界に身を置いて多くの諸先生のすばらしい研究成果を見るにつけ、まだまだ私は若輩者であることを自覚させられます。髪の毛が少ないので見た目は若輩者ではなくなっておりますが、実際のところまだまだ若輩者です。

そんな私ですが、私なりに細菌学会への期待と抱負について考えてみました。

細菌学に関わらず、研究についての講演などを聴くと、今は「アウトプット」を求められる時代であることが強く感じられます。つまりは「成果を出す」という事です。何らかの公的な予算を使って研究を行う以上、その成果を出さなければならないのは当然ですが、それが論文として発表するということだけでなく「役に立つ」、具体的にいうなら「商品にする」「産業化される」などのことが求められてきているように感じられます。たしかに、「自分の行っている研究がどのように世界に貢献できるか」あるいは「どのようにしたら自分の研究が世界に役立てられるか」という視点を忘れないようにすることは大事だと思います。もしかしたら自分以外はみなさんその視点を忘れないで研究を行っているのかもしれません、私の場合は、ともすると単に「これはどうなっているのだろう?」という興味や「これがわかつたら論文に出来るのではないか」という視点になって

いるときがあります。というよりも実際にはほぼいつもそうだと言っても過言ではありません。そういう意味では日常的に大きな目的を見失っている状態にあるとも言えそうです。これは大きな反省点であると感じています。

ただ、それでは「役に立つ」研究は、「役に立つことを目的として」始められたのかというと、必ずしもそうとは限らないのではないかと思います（役に立つことをしてきたことはないのでわかりませんが）。役に立つと思って始めたでも役に立つとは限らないし、単に興味から始めた研究でも役に立つかかもしれません。そもそも役に立つことがあらかじめわかっている研究でしたら、とっくに誰かがやっているはずですから。結局、どんな研究がいつ・どんな形で役に立つかは誰にもわからないのだと思います。そのため役に立ちそうな研究を実際に応用に進めていくための「橋渡し研究」が重要視されてきているのかもしれません。

ということで、ごちゃごちゃと書いてきましたが、私が細菌学会に対して期待することは、あえて「逆張り」をしてほしいということです。

今の世の中の流れが「役に立つ研究」「橋渡し研究」重視であるなら、あえて「基礎研究重視」を訴えていってほしいということです。役に立つ研究や橋渡し研究の意義は、今さら細菌学会が声を大にして訴えなくても誰もが訴えていることですから、そういうことは企業やより応用目的の強い学会に任せておいて、実際にはどんな研究が役に立つかわからない以上、「いつ役に立つかわからない研究」が途絶えることのないように世の中に支援を訴え続けることが重要なのではないかと思っています。誰がこの「逆張り」をするべきかと言えば、細菌学会こそがそのような役割を担っていく必要があるような気がしています。いや、自分が役に立つ研究をすることができる自信がないから言っているわけではありません・・・たぶん。そして、誰かの「いつ役に立つかわからない研究」から髪の毛を増やす細菌由来成分が見つかる日が来る事に期待しています。

【新役員のメッセージ】 細菌学会への期待と抱負



酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 獣医細菌学ユニット
村田 亮

2014年4月から酪農学園大学獣医学類の講師として働いております、ムラタリヨウと申します。よろしくお願い致します。2006年に現在の職場、獣医細菌学ユニット（当時は“獣医伝染病学教室”でした）を卒業した出戻りです。大好きな北海道で、恩師、菊池直哉教授の下、のびのびと教育・研究に没頭しております。

酪農学園卒業後は北海道大学獣医学研究科でウイルス分野の研究室に進学し、学位を取得致しました。前職は東京農業大学畜産学科であり、生産動物の糞尿にまみれながらも学生たちと楽しく家畜衛生に携わっておりました。しかしながら、学部生時代からとにかく「細菌学」に魅せられており、いつかは細菌分野に戻って来たい！毎日シャーレを突いていたい！そんな願いがようやく叶ったところであります。そんなわけで、恥ずかしながら細菌分野に人脈はなく、細菌学会に入会したのも今年であります。8月に北海道支部会に参加させて頂き、諸先生方の発表にとても刺激を受けました。今後ともぜひご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。

現在、専門と言えるだけの成果がまだありませんが、興味を持っている主な細菌種は *Streptococcus dysgalactiae* です。前職の農大でも豚のレンサ球菌症について触れる機会が多く、養豚現場に多大な被害を与えながらも感染源や伝播経路、毒力を規定している因子に不明な点が多いために有効な対策法が確立されていません。さらにはこの時代にあって、分類体系や遺伝的背景がぼんやりし続けているという、このやっかいな菌種について、少しずつ解明していかなければ、と考えております。

もう一菌種、当研究室が長年追い続けているレプトスピラについても、現在勉強中です。もはや伝統芸能に近い菌株の継代や MAT の技術、少しでも菊池先生から継承したいと思うのですが…いざやってみると、これほどメンドクサイとは！MAT を少しでも簡便に、実用的に進歩させることも視野に入れ、レプトスピラ症を扱っていかなければと思います。

所属してまだわずか数か月ではありますが、細菌学会を通じて、既成概念にしばられない柔軟な研究を目指したいと考えております。今後お目にかかる機会も増えると思いますので、何卒末永くお付き合い頂けますよう、お願ひ申し上げます。

【新役員のメッセージ】 細菌学会への期待と抱負

『新幹事の帶畜大・豊留です』



帯広畜産大学 動物・食品検査診断センター 食品リスク分野
豊留 孝仁

新たに細菌学会北海道支部幹事となりました帯広畜産大学の豊留孝仁です。他の世話人の先生方とともに細菌学会北海道支部および支部会員の先生方の発展に少しでも貢献できれば幸いです。

この稿で私の名前を初めて知るという北海道支部の先生方も多いと思うので、簡単に自己紹介を。千葉県生まれ千葉県育ちで出身校は千葉大学薬学部、卒業後に引き続き薬学研究科博士前期課程を修了しました。千葉大学では微生物薬品化学研究室（澤井哲夫先生）の下で基質拡張型 β -ラクタマーゼに関する研究を行っていました。博士課程は東京大学医学系研究科に進み、医科学研究所の笹川千尋先生の下で赤痢菌の分泌タンパク質に関する研究を行いました。ここまででは細菌学にどっぷり浸かっていましたが、博士課程を修了した後に千葉大学真菌医学研究センター（臨床感染症分野・亀井克彦先生）で病原真菌の研究に飛び込みました。そして平成24年10月に帯広畜産大学動物・食品衛生研究センター（現在の動物・食品検査診断センター）に赴任してきました。帯広に移ってからも真菌が引き起こす感染症や產生するカビ毒とその毒性に関する研究を進めています。真菌を研究対象としていて細菌学会の中では異色（？）ですが、なにとぞよろしくお願ひいたします。

今回の支部会報の特集が『細菌学会の将来を語る』ということで、細菌学会への期待と抱負についての原稿依頼をいただきました。新幹事、というよりは細菌学会の会員の一人として、今後細菌学会が果たす役割・期待する役割などについて、二つの点について思いつくままに書いてみたいと思います。

まず、（細菌学会に限りませんが）支部会も含めて学会が果たす役割の一つとして私が思いつくのが研究者ネットワークの構築です。「こんなおもしろい研究をやっている先生がいる」、「こんな手法を使って研究をしている先生がいる」といった情報の収集手段となると同時に目の前の研究者とのネットワークをその場で構築できるのが総会や支部総会の大きな役割だと思います。自分も細菌学会総会・支部総会を含めていろいろな学術集会で新たな研究者と知己を得たことは大きな財産になっています。もちろん、ここまで書いてきたことはすでに現在でも細菌学会として十分に役割を果たしていると思います。今後の課題と

しては「如何に会員（とくに学生や若手研究者の入会者）がネットワークに参加してくれるか」が重要と思います。細菌学会としても総会での若手によるシンポジウムや若手研究者育成のための支援プログラム（若手コロッセウム開催等）のような若手研究者がネットワークに参画し、構築するための手助けを行っています。私も何度か若手コロッセウムに参加して、そのたびに非常に刺激を受けました。今後もぜひ継続していってほしいと思いますし、今まで参加していなかった研究者の目にも「こんなことをやっているぞ」とどんどん晒していけば、今後も新たな研究者がネットワークに参加してくれると期待しています。ただ、総会や若手コロッセウムは全国規模で「遠いなあ」、「ちょっと時間が…」といった理由で参加を見送っている研究者（特に学生とか）もいるかもしれません。そういった研究者に、（地理的に）比較的近くて、規模もそれほど大規模ではなくて、参加者同士の距離が近くて（ちょっとつかまえて質問しやすい？）、結果として細菌学会への足掛かりをつかみやすい、というのが支部総会かな、と思います。また、関東支部がサポートする若手によるインターラボセミナー開催も学生も含めた若手研究者が細菌学会への足掛けかりにする良い取り組みと思っています。支部総会（や支部でのミーティング）でローカルなネットワークに参加して、研究者ネットワークに参加し、そして全体の総会やそのほかの様々な学術集会などへと広げていく。その足掛けかりとして支部が細菌学会全体を支える役割を果たしていくことが期待されると考えています。

もう一つの学会が果たす重要な役割として情報提供があると思います。学術集会自体が情報提供の場と言えますが、その他にも日本細菌学会ではウェブサイト (<http://www.nacos.com/jsbac/>) で様々な情報を提供しています。北海道支部でもウェブサイト (<http://www.jsb-hokkaido.net/index.html>) を通じて、北海道支部学術総会のお知らせやこの会報の公開などの情報提供を行っています。今後もウェブサイトを通じた情報提供は大きな位置を占めていくと思いますが、現在のウェブサイト単体ではどうしても緊急性が高い情報や拡散したい情報を「早く」そして「広く」という点で限界があると思います。そこでブログやソーシャルネットワーキングサービスなどの他の方法でも情報提供していくことが今後重要になると考えています。誰でも簡単に情報提供ができる時代になり、それらを通じて情報を得る人も多くなっています。「じゃあ、学会や支部会のアカウントを作って…」となりそうですが、これだとウェブサイトと同様に学会広報を担当する少数の運営者の負担になってしまいます。「誰でも簡単に情報提供ができる時代」ですので、会員全員が発信者として情報を提供していくような取り組みが重要に思います。「学会が開催されます」、「現在演題募集中です」、「こんな情報が新たに発信されました」…といったようなウェブサイト等を通じて発信された情報を受信した研究者がブログやソーシャルネットワーキングサービスなどを通じて新たな発信者として情報が流されていくことで広く早く情報提供ができるようになると期待します。

私も北海道支部の幹事として、そして細菌学会会員の一人として研究者ネットワークの構築や情報提供・発信のお手伝いをしていきたいと思っています。繰り返しになりますが、なにとぞよろしくお願ひいたします。

日本細菌学会北海道支部新支部長として

札幌医科大学医学部微生物学講座
横田伸一

平成 27 年 1 月より日本細菌学会の北海道支部長をつとめさせていただきます。私が北海道支部会員になったのが 2000 年 5 月のことでありましたので、本支部にはずいぶんお世話になっています。現会員の中でも在籍期間は長い部類に入ると思います。

昨今、細菌学会においては会員数の減少と財務状況の逼迫への対応が急務であることが叫ばれています。学会の執行部の先生方を中心としていろいろと知恵が絞られていますが、あちらを立てればこちらが立たずということもあり、なかなか抜本策というものは見つからないようです。まずは会員数の増加が必須ということになるのでしょうか。

さて、学会というものは小規模のものを含めると本当に数多くあります。関連分野の学会をひろってみても結構な数になります。私はこれまで多種多様なテーマの仕事をしてきましたが、テーマが変わるごとにその分野の学会に入会してきて、退会することをあまりしてきませんでした。さすがに年会費だけでもトータルするととんでもない金額になってきました。そのような事情で加入学会をだいぶリストラしてきたところです。私が細菌学会に入ったのが 1988 年ころです。その間数年間退会していた時期もあります。今でこそ微生物学講座所属で細菌学を生業にしていますが、一時期は細菌学会がリストラ対象の上位にあったわけです。理由を考えてみると、生化学、分子生物学、免疫学といった学会はジェネラルで、生物系の分野に身を置いている限りは何らかの形でかかわるが、細菌学となると細菌を扱わなくなった時点では関係ないとなるからでしょう。一方で、細菌を仕事の対象としている方々は意外と多いのですが、その中で細菌学会に入っておられない方はどういう方でしょうか。医療分野で感染症がメインの方は感染症学会、化学療法や感染対策をやっておられる方は、化学療法学会、臨床微生物学会、環境感染学会、農学分野では生物工学会、乳酸菌学会、基礎生物学の立場で細菌を材料として用いられている方は、分子生物学会、生化学会、感染免疫よりになってくると免疫学会へのアフィニティーが強くなる傾向があると思われます。従って細菌を使っていい仕事をされている方は随分いらっしゃるように思うのですが、細菌学会まで手が伸びていないのでしょうか。私の分野である医学系では感染症を疑わせる患者さんの検体の細菌検査はルーチンで動いています。私から見ればこれらは宝の山に思えます。ところが、細菌学会となると距離を置かれている方が少なくないと感じています。基礎研究や工学、農学的な応用研究を指向されている方々からは細菌学会は医学系であるという認識が強く、細菌検査や感染制御を業務とされている方々からは基礎の学会は難しいことばかりで関係ないといった声は確かに聴かれます。確かに一理あるのですが、“細菌”をキーワードにしていわゆる細菌学会の王道（といってもそんなものがあるのかはなはだ疑問ですが）以外の人たちも集めて新しい学問の展開ができるものかと思案しているところです。

私事にはなりますが、私は理学部化学科の出身で学部と修士課程での研究テーマが「緑膿菌のリポ多糖関連抗原の化学構造」がありました。当時は糖鎖の化学修飾や機器分析を駆使した構造決定を行っており、構造決定の意義づけとして感染症分野への応用など大義名分を述べていたと記憶しています。修士課程修了後に化学系企業に就職するのですが、そこではバイオ医薬分野の研究室があり、そこに所属して与えられたテーマが「ヒトモノクローナル抗体を用いた抗緑膿菌高力価免疫グロブリン製剤の開発」がありました。要は緑膿菌に対するヒトモノクローナル抗体を作製して抗菌薬耐性緑膿菌感染症の治療薬にしようというプロジェクトです。当時、イミペネム-シラスタチン（チエナム）が上市され、メロペネム（当時はまだコード番号 SM-7338 と呼ばれていました）が開発中の頃です。この時、抗体製剤の開発には必ずしも必須ではなかったかもしれません、私の持っていたリポ多糖の糖鎖に関する知識が非常に役立ちました。その時に、学生時代にこのようなプロジェクトのことを理解していれば研究の展開も変わっていたろうし、学生時代に仕事を生化学会（当時の大学の研究室におけるほぼ唯一の参加学会でした）以外の学会でアピールしていれば

インパクトもあつただろうし、共同研究へと発展していたかも知れないと残念に思ったものです。私自身はそのようなこともあって、自分の研究分野に閉じこもるのではなくてできる限り広い視野から自分の研究を眺めたい、広げたいということを目指しています。

前支部長の山口博之先生が北海道支部の活性化のため次から次へとアイディアを出され、それを実現されました。そのおかげで北海道支部会のアクティヴィティーは目覚ましいぐらい上がってきたと思います。山口先生のバイタリティーには頭が下がると同時にその後を引き継ぐのは正直重荷ではあるのですが、私なりにできることを少しでもやっていくつもりでおります。

さて、山口先生を中心に築かれた支部会を衰退させないように、さらに少しでも前進させるのが私の役目と思っています。今回、山口先生の新評議員をご推薦下さいとの呼びかけがあった時にこれから支部会運営を考えて幹事メンバーの見直しを提言させていただきました。以前は、評議員は主として教授職の研究室を主宰されているある方で、幹事はその研究室の若手の先生方で基本的には構成されておりました。その後、評議員の先生方はその都度新しい方をお迎えしていた一方で、幹事はそのままの状況で、その間に所属が変わった方や学会にあまり参加されなくなった方が増えて幹事としての位置づけが不明確になっていると感じていました。今回、以前のように若手の先生方を中心に幹事を構成し、活躍いただこうと考えています。まずは、支部会報の編集委員としての活動です。支部会報は私支部長が編集委員長として調整役をさせていただきますが、実際の活動は幹事の先生方にお願いします。新しいアイディアをどんどん盛り込んでいただきたいと思います。細菌学会会員にも知らせたいさらに参加してもらいたい研究会やセミナーについて内容を含んだ形でのアンケートや参加報告を掲載する、あるいはテクニカルチップのような最近はやりの実験技術や自身の実験のアイディアの紹介などを掲載するというはどうでしょうか。会誌は年1回の発行が基本ですが、会誌発行の時期になって原稿を書き集めるというよりも思いついたときに投稿していただくような形にできればと思っています。いろいろな発案を受け入れる場になることを期待しています。支部会報は支部会ホームページにアップされ、日本細菌学会のサイトからもリンクされています。公的なサイトで広く発信されます。幹事の方々には、支部学術集会の座長なども積極的にやっていただき、支部会運営を主導するくらいに活躍いただきたいです。

学術総会は、基本的にはその会の総会長の裁量にゆだねて、総会長のカラーを存分に出していただくのがよいと考えます。最近は大きな学会であればあるほど一般演題はポスター発表になっています。必ずしも多くはないオーラル発表の機会を設ける意味でも支部会の価値は十二分にあると私は思っています。先ほど申し上げたいろいろな分野の方々の発表、若手の発表、少々完成度は低くても思い切って公表してみる発表などなど懐は広くもって受け入れていきたいと思っています。以前から私は一般演題の応募に際して、発表者が発表時間を選択できる方式というのを考えています。自分にとってベストなプレゼンテーションが可能であるという時間を自ら指定するのです。まとまった仕事とプレリミナリーな仕事が同じ発表時間である必要は全くないという考え方です。プログラムを編成する側としては大変で、実は本年私が主催させていただいた学術集会で試みとして行うことも考えたのですが、さすがに躊躇していました。どんな感じになるのか1回試してみたいところではあります。支部会賞は山口先生のご提案から始まっています。失礼ながら私は正直いって当初、経済的な面も含めて長続きするのか疑問もあったのですが、うまく定着し、モチベーションの上昇につながってきているようです。さらに学術集会自体にしまりが出てくる役割を果していくように思われます。ただ、天邪鬼な私としては優秀な方々ばかりいい目を見るというのがあまり気に入らないのもあって、あまねく還元していく（鼠小僧ではありませんが）のも必要ではないかと感じていました。そこで、遠方から参加される学生さん（発表者に限る）への旅費の補助制度を提案させていただきました。実はこれはもともと私の先代の教授である藤井暢弘先生の発案だったのですが、立ち消えになっていました。数年前にもう一度検討してもらい、現在導入されています。

私としては、小回りのきく地方レベル、あるいは若い方々の地道ながらも積極的な活動がやがては全国規模に広がって細菌学会の大きな力になると確信しています。今後とも北海道支部の活動が盛り上っていくことを願っています。

本当に思いつくまま雑多なことを長々と書いて、失礼いたしました。とにかく何か面白いことをやってみたいと思っているところです。それでは皆様方、今後ともよろしくお願ひいたします。

日本細菌学会理事を務めて

酪農学園大学獣医学群獣医細菌学
菊池直哉

2012年から2014年までの3年間、柴田先生の後を引き継ぎ北海道地区から日本細菌学会理事としてつとめて参りました。それまでは評議員でしたが、熱心に評議員会・総会に参加した訳でもなく、議事録を見たこともない私がこのような大役を責任持ってこなせるのか当初は不安がありました。しかし、多くの先生のご支援を受け無事任期を終了することができました。

3年間、理事として細菌学会の運営に携わって参りましたが、これまでの理事の諸先生のご苦労と様々な問題点があることが理解できました。現在、細菌学会の最も重要な課題は、1) 日本細菌学会の活性化、2) 会員数の減少です。この2点は切っても切り離せない関係で、会員数の減少は活性化の低下に繋がります。活性化につきましては前理事でありました柴田先生の頃から同様に問題になっておりましたが、未だ抜本的な解決策もなく進展しておりません。

会員数につきましては、実際の数字を目の当たりに致しますと危機的な状態であることが判明致しました。現在の会員数（2014年7月現在）は一般会員2,096名、学生会員626名、計2,722名です。2000年では一般会員3,128名、学生会員246名、計3,436名でしたので、学生会員は増加したもの的一般会員は1,000名以上の減少です。何故このような会員減少が見られるのでしょうか。今年6月に福岡で開催されました日本感染症学会および化学療法学会の合同学会に参加しました。最初にその参加者数の多さに驚きました。細菌学会では約1000名の参加者ですが、感染症学会では2000人以上、3000人近くの参加者で、どの会場も満席に近い状況で、会場は熱気に包まれておりました。発表は細菌のみならずウイルス・寄生虫も含まれておりますが、大学の研究者のみならず、医師、検査室など広い職域の方が口頭とポスターで発表しており、裾野の広さを感じました。細菌学の最先端の研究はもちろん必要ですが、このような広い職域の教育研究者と現場の担当者を引き込んで細菌学と臨床現場との接点を大切にして行く必要があると感じました。

学生会員はこの10年間で増加しているものの、それが一般会員の増加に繋がっております。すなわち学生会員から一般会員への移行はスムースに行っていっていないのです。何故このように細菌学会に留まってはくれないのでしょうか。学会員として留まるメリットはないのでしょうか。あまりにも専門的になりすぎ、敷居が高くなつたのでしょうか。色々な理由があるかと思います。しかし、その中で若手細菌学者の交流の場が徐々に広がりつつあります。細菌学若手コロッセウムの開催など、若手を中心としたセミナーが多く計画されております。このように若手研究者が活躍できる環境を整えて行く必要があるでしょう。裾野の拡大が活性化の第一段階です。今後の発展に期待しております。

細菌学会のもう1つの懸案は予算に関する懸案です。会員数が減少しますとそれだけ学会の収入が減少します。事実今年度の予算はこれまでにない赤字予算でした。予算的に余裕のある時期には気がつきませんでしたが、理事として予算にかかわってきますと、必要なもの、不要なものが目についてきます。あまりに緊縮財政をとることにより組織自体が縮小することは避けなければなりませんが、今一度見直す必要があると思います。

最後に、私がこの3年間担当しておりました広報委員会を中心にお話ししていきたいと思います。本委員会は、委員長が私（菊池）、副委員長が大阪府大の向本先生、そして次回

の理事として選出されました北大の山口先生をはじめ7名から構成されております。広報委員会ではメーリングリストを用いての各種お知らせ、細菌学会HPの維持管理が中心です。前委員長からの引き継ぎではあまり問題もなく大きな仕事はないとのことでしたが、種々問題点があることが判明しました。最も大きな問題はHPの更新です。当時のHPは運用後すでに3年以上経過し、新鮮さも低下し興味ある内容に乏しくなっておりました。評議員会におきましてもHPに対して批判的な意見も出されたことから、より魅力的なHPに更新する必要がでて参りました。委員会では、HPの更新と英語版の作成に向けて本委員会でとり進めることが決定されました。向本副委員長を中心となり様々な案が寄せられ、特に山口先生から画期的な案が提案され、それを土台として今日のすばらしいHPが完成しました。本HPはまだ一部未完成ですが、とても魅力的なものとして完成したと、多くの先生からお褒めの言葉をいただき、委員の皆様に感謝しております。HPは学界の顔に当たります。細菌学をHP上にいかに魅力的にアピールするかが重要であります。それにより学生をはじめ多くの人に細菌学に興味を持っていただくことが重要です。その結果として細菌学会に入会者が増加し、それが学会の活性化に繋がるものと思います。

このように学会活動に重要な広報委員会、その他3つ委員会にも所属致しました。私としましては大変なこともあります、やり残した点も多々ありました。3年間活動することができとても良い経験となりました。北海道支部の諸先生、評議員の諸先生、そして背中を押していただいた柴田先生に感謝申し上げます。

平成27年度以降の次期理事として山口先生が選出されました。先生の卓越した創造力を発揮して細菌学会の危機を救っていただきたいと思っております。山口先生はじめ、これから理事の先生に期待しております。

第 82 回日本細菌学会北海道支部学術総会について

北海道医療大学歯学部口腔生物学系微生物学分野
教授 中澤 太

伝統ある日本細菌学会北海道支部の、第 82 回学術総会を、北海道医療大学歯学部口腔生物学系微生物学分野が担当することが、第 80 回日本細菌学会北海道支部学術総会（於：東京農業大学オホーツクキャンパス）で決定されました。

担当校として、多数の皆様に御参加を頂き活発な学術的討論の場になることを期待して準備を進めてきました。その内容を下記に記載致します。

記 第 82 回日本細菌学会北海道支部学術総会

*年月日： 平成 27 年 9 月 5 日（土曜日）

*会 場： 北海道医療大学心理科学部

（北海道医療大学あいの里キャンパス内）

住 所：〒002-8072 札幌市北区あいの里 2 条 5 丁目

アクセス：JR 学園都市線 あいの里教育大駅下車 徒歩約 5 分
(札幌駅～あいの里教育大駅：約 25 分)



*一般演題： 全て口演を予定しています。
後日、準備事務局から演題募集要項をお知らせいたします。

*特別講演：演者：光山正雄先生

京都大学名誉教授、
京都大学大学院総合生存学館 特定教授
演題：「細胞内寄生菌研究 37年間から学んだもの」
演者からのメッセージ
“研究データだけの講演でなく、私の研究の流れとそこから学んだこと、得たこと、で若い研究者の方々にお伝えしたいメッセージも込めたお話しをさせて頂ければと思います”
演者の紹介

多くの会員の皆様が御存知のように、光山正雄先生は、「リステリアや結核菌など細胞内寄生性細菌の病原因子と感染における免疫応答」の研究で、極めて多く業績を残され、この分野での世界的トップランナーであります。

科学研究費の特定領域研究費や基盤研究Aなど、これまでに多くの外部資金を獲得されている他、日本細菌学会の理事や第81回日本細菌学会総会長（京都、2008年）等を歴任されています。

また、日本学術会議の病原体分科会委員長や日本学術振興会特別研究員審査委員の他、文部科学省における様々な委員会の委員なども歴任されております。

*懇親会： 平成27年9月5日（土曜日） 学術総会終了後、会場近くに設定する予定です

第82回日本細菌学会北海道支部学術総会 準備事務局
準備委員長：鎌口有秀（北海道医療大学歯学部口腔生物学系微生物学分野）
E-mail : bisei@hoku-iryo-u.ac.jp
電話 : 0133-23-2513
FAX : 0133-23-1385

動物衛生研究所北海道支所における私の研究： 『柳の下のにはまだドジョウがいた』

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 動物衛生研究所 寒地酪農衛生領域
内田 郁夫

動物衛生研究所は、2001年に組織改編により農林水産省家畜衛生試験場から独立行政法人農業技術研究機構動物衛生研究所となりました。当研究所には、本所（つくば市）のほか、海外病研究施設（小平市）、北海道支所（札幌）、九州支所（鹿児島市）の3つの拠点があります。私の勤務する北海道支所は、1949年に農林省家畜衛生試験場の北海道支場として白老郡登別町（現在の登別市）に設置されました。その後、1966年に現在札幌ドームのすぐ隣に位置する札幌市羊ヶ丘に移転するとともに、研究体制の拡充が進められてきました。2001年に独立行政法人となってからは、動物衛生研究所北海道支所として、わが国の生乳生産量のおよそ半分を生産している大酪農地帯において、酪農衛生に関する研究を中心とした事業を推進してきました。また、北海道の畜産現場で問題となっている疾病の病性鑑定や、講習、研修、技術相談などを通じた技術普及など、家畜衛生の向上のための基盤業務も担当しています。

現在、北海道支所では大規模酪農場で生産性阻害要因となる、乳房炎等の泌乳障害および下痢・肺炎等の疾病について、それらの発病機構を明らかにするとともに、疾病的診断技術の高度化と効果的な予防策の策定を目指した研究を行っています。乳牛の下痢の原因の一つにサルモネラがあります。私たちの研究グループは、これまで、病性鑑定等の業務を通じて収集した牛由来サルモネラにおける性状の経年的変化について解析してきました。

牛のサルモネラ症は、以前は乳用雄子牛などの肉用牛に多発する疾病でしたが、近年、乳用牛、特に搾乳牛における発生が増加し、酪農経営上大きな問題となっています。サルモネラには2500種以上の血清型がありますが、現在我が国では、牛のサルモネラ症の原因となる血清型で一番多いのは *Salmonella Typhimurium* (ST) です。近年問題となっている成牛での発生の多くは ST によるものです。80年代までは、ST による搾乳牛のサルモネラ症はまれでしたが、1990年代に入ってからその発生数は急増しました。当初、このようなサルモネラ症の発生増加の原因として、濃厚飼料の多給等に伴う宿主側の要因が注目されていました。しかし、パルスフィールド電気泳動 (PFGE) 等による遺伝子型の解析結果から、1992年以降、分離菌に劇的な変化が起きていることが明らかになりました¹⁾²⁾⁵⁾。すなわち、ST 多剤耐性ファージ型 104 (DT104) と同一の遺伝子型 (PFGE I型) を示す菌が増加していたのです。DT104 とは ST において 200種類以上あるファージ型の一つで、1986年に英国で出現し、その後、1990年代に入って世界中に広まり、人の食中毒や、家畜のサルモネラ症の原因菌として問題となった菌です。我が国においてはあまり注目されていないかもしれません、関西地方において食中毒の大きな発生も報告されています。多くの DT104 はアンピシリン、クロラムフェニコール、ストレプトマイシン、サルファーアジン、テトラサイクリンなどの少なくとも 5 剤の薬剤に対する耐性を示し、重症例が多いという疫学的観点から、従来の ST より病原性の強いことが示唆されています。そこで、我々は DT104 の病原性関連因子を探索するために、ゲノム解析を実施したところ、この菌が百日咳毒素と性質がよく似た蛋白 (ArtA/ArtB) を産生することを発見しました³⁾。さらに、

この毒素は百日咳毒素感受性 G 蛋白質を ADP リボシル化する毒素であることも明らかにすることことができました⁴⁾。百日咳毒素の研究といえば、1980 年代に、北海道大学薬学部の宇井先生と堅田先生の詳細な毒素の作用メカニズムの解明と、この毒素による ADP リボシル化の標的分子である GTP 結合蛋白である Gi の発見があります。宇井先生は ADP リボシル化毒素であるジフテリア毒素とコレラ毒素について、百日咳毒素が 3 番目の ADP リボシル化毒素であることから、「柳の下にはドジョウが 3 匹いた」とエッセイに記載されています。私たちの見出した毒素は何匹目になるかわかりませんが、柳の下にはまだ小さなドジョウがいるようです。

成牛型サルモネラ症増加は前述の飼養形態の変化によるところが大きな要因であることは間違いないものの、現在、成牛型サルモネラ症の発病機構を解明するため、この蛋白の生物活性および病原性との関連性についての解析を進めています。

DT104 は 2000 年以降その分離数が減少傾向にあり、それに代わって既存のファージ型に分類されない新たな遺伝子型 (PFGE VII 型) を示す多剤耐性 ST が出現し、現在では、北海道において最も多く分離される系統となっています。この菌は、*artA/artB* 遺伝子を保持していませんが、病原性プラスミド上に薬剤耐性遺伝子が乗っていることを特徴とし、一部の菌はこれまでみられなかったセファゾリン耐性の形質が認められます⁵⁾⁷⁾。このような研究から、野外で分離されるサルモネラの遺伝学的性状は一定ではなく、数年単位で変化している状況が明らかになってきました。これらの病原菌を詳細に分析すれば、また他の種類のドジョウが見つかるかもしれません。

掲載誌

- (1) Tamada et al., J. Clin. Microbiol. 39:1057-1066. (2001)
- (2) Tanaka et al., J. Clin. Microbiol. 42:1807-1812. (2004)
- (3) Saitoh et al., Microbiology 151:3089-3096 (2005)
- (4) Uchida et al., Microbiology. 155:3710-3718. (2009)
- (5) Tamamura et al., Appl. Environ. Microbiol. 62:3768-3771. (2011)
- (6) Kurosawa et al., Veterinary Microbiol. 160:264-268. (2012)
- (7) Tamamura et al., Pros One. 8:e77644. (2013)

日本細菌学会北海道支部会則

総 則

1. 本会は日本細菌学会北海道支部という。
2. 本会は北海道在住の細菌学関係研究者によって組織される団体である。
3. 本会は細菌学領域の進歩を促進することを目的とする。
4. 本会の目的を達成するために次のような事業を行なう。
 - イ. 学術集会（学術総会・集談会等）の開催
 - ロ. 日本細菌学会本部との連絡
 - ハ. 国内の関係諸機関諸学会との連絡
 - ニ. その他必要と認められる事業

会 員

5. 本会の趣旨に賛成する人は会員となることができる。
6. 会員は会費を納めなければならない。
7. 会員はその業績を学術総会において発表することができる。
8. 会員は評議員 1名以上の賛成を得た上で本会の運営に関する議案を評議員会に提出することができる。
9. 本会の趣旨に賛同し、本会の活動を援助するために、毎年一定の賛助会費を納めた団体あるいは個人を賛助会員とする。

役員及び役員会

10. 本会に次の役員をおく。

支部長	1名	評議員	若干名	庶務係	1名
会計係	1名	幹事	若干名	会計監事	2名
11. 次期支部長は現評議員の互選に基づきこれを定め総会において了承を得る。
12. 新評議員は会員の中から、支部長がこれを委嘱する。
13. 会計監事、幹事、庶務係及び会計係は会員の中から支部長がこれを委嘱する。
14. 支部長、幹事、庶務係ならびに会計係は会計監事になることができない。
15. 支部長は本会を代表し、会務を統括する。
16. 評議員は支部長の選出のほか、本会の事業の企画、立案、運営等について評議する。
17. 評議員会の議事は、出席者の過半数を持って決せる。但し、可否同数の場合は支部長の判断により決する。
18. 幹事は支部長を補佐する。
19. 会計監事は本会の会計を監査する。
20. 評議員会及び幹事会は支部長が召集する。
21. 役員の任期は 2 年とし再任を妨げない。
22. 役員に欠員を生じた場合の後任役員の任期は、前任者の残任期間とする。

集 会

23. 支部総会及び学術総会は、原則として年に 1 回開催される。
24. 支部総会において支部長は会務の報告を行なう。
25. 本学会の運営の基本に関する事項及び本会則の変更は、会務総会において出席者の

過半数の賛同によって決定する。

26. 時宜に応じて他の学会、研究会等と合同して集会を開催することができる。
27. 総会長は、原則として学術総会の一般演題より優秀な発表を選出し表彰しなければならない。その名称を日本細菌学会北海道支部会賞とする。ただし表彰の内容は総会長に一任する。

学術総会長

28. 学術総会長は、評議員会で推薦し、支部総会で決定する。

会 計

29. 本会の経費は会費及び贊助会費、日本細菌学会からの補助金、その他の収入をもつてこれに充てる。
30. 本会の会計年度は1月1目に始まり12月31日に終わる。
31. 会計監事はこの会の会計の監査を行うものとする。

事務所

32. 本会の事務所は支部長所在の機関に置くものとする。

付 則

33. この会則は平成3年2月27日より施行する。
34. 会則の変更は評議員会の議決により支部総会の承認を必要とする。
35. 支部会員会費は年額1,000円とする。贊助会費は一口10,000円とする。
36. 講師謝礼金
 - イ・集会の講師に対する謝礼金及び旅費を支出することができる。
 - ロ・集会の講師謝礼金は、北海道在住の講師については2万円、その他の講師については3万円とする。
 - ハ・講師謝礼金の変更は評議員会及び総会でこれを報告しなければならない。
37. 学生研究奨励金
 - イ. 北海道支部学術総会開催地と発表者が所属する大学・大学院とが遠隔である場合、助成金として1万円を支部会幹事・評議員会の審議を経て支給する。
 - ロ. 対象者は大学学部学生と大学院生とする
38. この会則は平成10年1月1日より一部改正施行する。
39. この会則は平成14年1月1日より一部改正施行する。
40. この会則は平成16年1月1日より一部改正施行する。
41. この会則は平成24年1月1日より一部改正施行する。
42. この会則は平成25年1月1日より一部改正施行する。

日本細菌学会北海道支部学術総会歴代開催記録

回	開催年月日	総会世話人／総会長	総会開催場所
18	1961.2.17		北海道大学医学部講堂
19	1961.11.28		北海道大学農学部新館
20	1962.2.17	植竹久雄（北海道大学医学部）	札幌医科大学西第2講堂
21	1962.11.17	飯田広夫（北海道立衛生研究所）	北海道立衛生研究所
22	1963.2.23	山田守英（北海道大学医学部）	札幌医科大学西第2講堂
23	1963.12.6	植竹久雄（北海道大学医学部）	北海道大学農学部本館中講堂
24	1964.2.22	平戸勝七（北海道大学獣医学部）	北海道大学獣医学部
25	1964.12.4	林 喬義（札幌医科大学医学部）	札幌医科大学西第3講堂
26	1965.2.19	三浦四郎（北海道大学獣医学部）	田辺製薬ビル 6F
27	1965.12.3	飯田広夫（北海道立衛生研究所）	北海道立衛生研究所
28	1966.2.18	伊藤英治（北海道大学理学部）	
29	1966.12.9	大原 達（北海道大学結核研究所）	田辺製薬ビル 6F
31	1967.12.9	林 喬義（札幌医科大学医学部）	札幌医科大学西第3講堂
32	1968.2.23	飯田広夫（北海道立衛生研究所）	札幌医科大学西第3講堂
33	1968.12.6	山田守英（北海道大学医学部）	武田ビル
34	1969.2.27	高橋義夫（北海道大学結核研究所）	武田ビル
35	1969.12.12	三浦四郎（北海道大学獣医学部）	武田ビル
37	1971.1.22	飯田広夫（北海道大学医学部）	武田ビル
38	1972.2.26	大原 達（北海道大学結核研究所）	ムトウビル 6F 講堂
42	1974.9.27	林 喬義（札幌医科大学医学部）	ムトウビル 6F 講堂
43	1975.9.26	林 喬義（札幌医科大学医学部）	ムトウビル 6F 講堂
44	1976.9.17	熊谷 満（北海道立衛生研究所）	北海道立衛生研究所共用東講堂
45	1977.9.30	熊谷 満（北海道立衛生研究所）	ムトウビル 6F 講堂
46	1978.9.29	鈴木 武（北海道大学歯学部）	北海道立衛生研究所共用東講堂
47	1979.9.22	鈴木 武（北海道大学歯学部）	北大歯学部講堂
48	1980.9.26	梁川 良（北海道大学獣医学部）	ムトウビル 6F 講堂
49	1981.9.17	梁川 良（北海道大学獣医学部）	ムトウビル 6F 講堂
50	1982.9.17	山本健一（北海道大学免疫科学研究所）	ムトウビル 6F 講堂
51	1983.9.9	黒田収子（北海道薬科大学）	
52	1984.10.26	飯田広夫（北海道大学医学部）	ムトウビル 6F 講堂
53	1985.9.13	飯田広夫（北海道大学医学部）	ムトウビル 6F 講堂
54	1986.9.19	伊佐山康郎（家畜衛生試験場北海道支場）	ムトウビル 6F 講堂
55	1987.9.25	小熊恵二（札幌医科大学医学部）	ムトウビル 6F 講堂
56	1988.10.21	小熊恵二（札幌医科大学医学部）	大通り公園ビル(ヤクルト)会議室
57	1989.9.29	宮川栄一（家畜衛生試験場北海道支場）	家畜衛生試験場北海道支場会議室
58	1990.9.28	宮川栄一（家畜衛生試験場北海道支場）	
59	1991.11.15	皆川知紀（北海道大学医学部）	ムトウビル 6F 講堂
60	1992.11.20	皆川知紀（北海道大学医学部）	北海道大学百年記念会館講堂
61	1993.11.13	平棟孝志（酪農学園大学獣医学部）	酪農学園大学獣医3号館
62	1994.10.29	中島良徳（北海道薬科大学薬学部）	北海道薬科大学
63	1995.10.7	馬場久衛（北海道医療大学歯学部）	北海道医療大学P1講堂
64	1996.9.21	江口正志（家畜衛生試験場北海道支場）	農林水産省北海道農業試験場
65	1997.10.25	渡邊継男（北海道大学歯学部）	北海道大学術交流会館
66	1998.10.24	都築俊文（北海道立衛生研究所）	北海道立衛生研究所講堂
67	1999.10.23	藤田晃三（札幌市衛生研究所）	札幌市衛生研究所
68	2000.9.28.29	中根明夫（弘前大学医学部）	弘前大学医学部
69	2001.10.27	絵面良男（北海道大学水産学部）	北海道大学水産学部
70	2002.10.26	菊池直哉（酪農学園大学獣医学部）	酪農学園大学学生ホール
71	2003.9.14	大山 徹（東京農業大学）	東京農業大学
72	2004.9.3	藤井暢弘（札幌医科大学）	札幌医科大学記念ホール
73	2005.9.17	柴田健一郎（北海道大学）	北大學術交流会館
74	2006.9.2	磯貝 浩（札幌医科大学）	ムトウビル 6F 講堂
75	2007.9.8	中澤 太（北海道医療大学）	北海道医療大学サテライトキャンパス
76	2008.9.6	鈴木定彦（北海道大学）	北大獣医学研究科付属動物病院講堂
77	2009.9.18	山口博之（北海道大学）	北海道大学百年記念会館
78	2010.9.3-4	田村 豊（酪農学園大学）	北海道大学百年記念会館・酪農学園大学学生ホール

79	2012.8.28-29	川本恵子・倉園久生（帯広畜産大学）	とかちプラザ 2F 視聴覚室
80	2013.8.30-13	丹羽光一（東京農業大学）	東京農業大学生物産業学部
81	2014.8.29-30	横田伸一（札幌医科大学）	札幌医科大学医学部臨床教育研究棟 1 階講堂

日本細菌学会北海道支部 平成27-28年度新役員・名誉会員名簿

日本細菌学会北海道支部会 役員名簿(敬称略)

評議員	所属
○ 磯貝 浩	札幌医科大学医学部動物実験施設部
内田 郁夫	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究所寒地酪農衛生領域
大山 徹	北海道文教大学人間科学部健康栄養学科
○ 川本 恵子	帯広畜産大学動物・食品検査診断センター
○ 倉園 久生	帯広畜産大学畜産衛生学研究部門食品衛生学分野
菊池 直哉	酪農学園大学獣医学群感染・病理学分野
木村 浩一	北海道文教大学人間科学部作業療法科
小林 宣道	札幌医科大学医学部衛生学講座
○ 柴田 健一郎	北海道大学大学院歯学研究科口腔病態学分野口腔分子微生物学
杉本 千尋	北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター国際協力教育部門
鈴木 定彦	北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター国際疫学部門
田村 豊	酪農学園大学獣医学群衛生・環境学分野
中澤 太	北海道医療大学歯学研究科口腔細菌学
丹羽 光一	東京農業大学生物産業学部食品香粧学科
東 秀明	北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター感染・免疫部門
○ 山口 博之 [△]	北海道大学保健科学研究院病態解析学分野感染制御検査学
○ 横田 伸一*	札幌医科大学医学部微生物学講座

幹事

臼井 優	酪農学園大学獣医学群衛生・環境学分野
大西 なおみ	北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター感染・免疫部門
相根 義昌	東京農業大学生物産業学部食品香粧学科
白石 宗	札幌医科大学医学部微生物学講座
高橋 晃一	札幌医科大学医学部動物実験施設部
豊留 孝仁	帯広畜産大学動物・食品検査診断センター
中島 千絵	北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターバイオリソース部門
長谷部 晃	北海道大学大学院歯学研究科口腔病態学分野口腔分子微生物学
松尾 淳司	北海道大学保健科学研究院病態解析学分野感染制御検査学
宮川 博史	北海道医療大学歯学研究科口腔細菌学
村田 亮	酪農学園大学獣医学群感染・病理学分野

会計幹事

鎌口 有秀	北海道医療大学歯学研究科口腔細菌学
小華和 枢志	北海道大学大学院医学研究科医学教育推進センター

名誉会員

林 喬義 先生、梁川 良 先生

○ 本会評議員

[△]本会理事

*支部長

編集後記

第81回日本細菌学会北海道支部学術集会が大盛況であったことを大変嬉しく思います。これも一重に総会長の横田先生さらにスタッフの方々のご尽力のおかげ、支部会会員を代表して厚く御礼申し上げます。支部会HP(<http://www.jsb-hokkaido.net/>)に”終了のご挨拶”へのリンクが貼ってありますのでご覧下さい。来年は中澤先生が総会長としてあいの里にて開催されます。アイディア満載の素晴らしい学会になることでしょう!! 多いに期待しています。宜しくお願ひします。

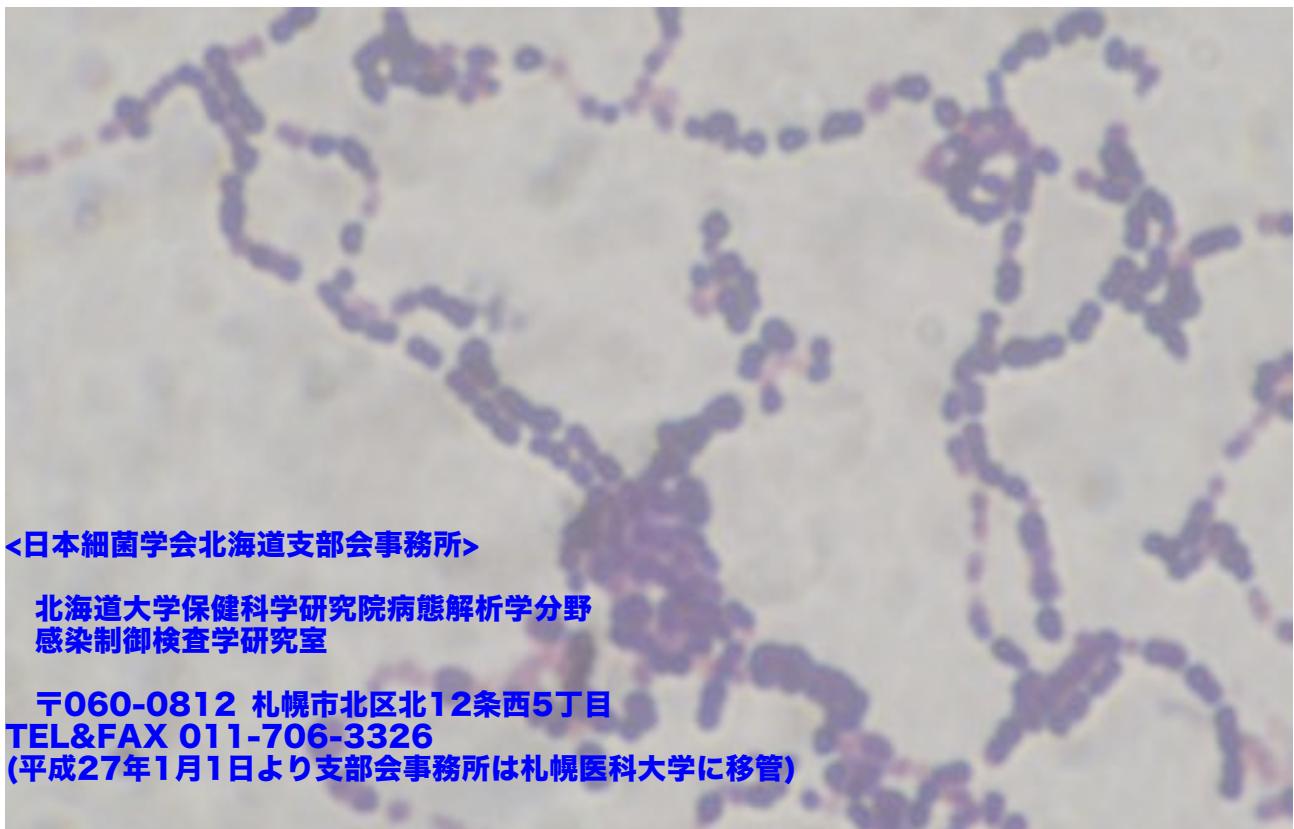
さて大変お忙しい中、原稿のご執筆を快くお引き受けいただきありがとうございました。当初の予定より遅くなりましたが皆様のご協力のおかげで北海道支部23号を配信することができ安堵しています。今号は『細菌学会の将来を語る』と題した特集号として、長年細菌学会の運営に携わられてきた小熊先生にご寄稿いただくとともに、幹事の先生が大幅に入れ替わりましたので、自己紹介も兼ね、細菌学会の将来について熱く語っていただきました。ぜひご覧ください。

今年一杯で支部長を札幌医科大学の横田先生に交代いたします。支部会幹事評議員のみならず支部会員の皆様に助けられなんとか、横田先生に無事バトンを渡すことができ安堵しています。4年間本当にありがとうございました。北海道支部会は所帯が小さくとも、さまざま研究領域をテーマとする極めて多様な研究集団だと思っています。その多様性が担保されることで、若い方々の興味の受け皿が担保され、そのことが学会の活性化に繋がっていくのではないでしょうか。

横田支部長新体制のもと支部会がさらに盛り上がっていくことを期待いたします。次号は来年になりますが、何か企画がございましたらお知らせください。会員の皆様からの寄稿をお待ちしています。会員の皆様あっての支部会。皆様からの企画を新支部長までドシドシお寄せください。お待ちしています。

平成25年 12月

北海道大学大学院保健科学研究院病態解析学分野 山口博之



<日本細菌学会北海道支部会事務所>

北海道大学保健科学研究院病態解析学分野
感染制御検査学研究室

〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目
TEL&FAX 011-706-3326
(平成27年1月1日より支部会事務所は札幌医科大学に移管)